

キラキラの、
キミの隣に

作 / 麦 (穀物P)

目次

第一話	春..ふつーの里帰り.....	6
第二話	夏..夢破れ、でもその先に道がある.....	28
第三話	秋..十年目の再会.....	44
第四話	冬..キラキラの、キミの隣に.....	66

各話紹介

第一話 春 ふつーの里帰り

登場…ヒシミラクル・トレーナー（オリジナル）

天皇賞（春）で無事勝利したヒシミラクルが実家に帰省する時、彼女の母親から家に来ないかと誘われたトレーナー。休暇の旅行ついでに少し『家庭訪問』をしたときの話。

第二話 夏 夢破れ、でもその先に道がある

登場…オリジナルウマ娘・ゴールドシップ

学園での夢を果たせず、故郷に帰ることを決めて迎えた最後の日の夜。ある縁から親しかつた先輩・ゴールドシップに誘われて、星を見に行く。

第三話 秋 十年目の再会

登場…リオナタール（アニメ二期に少し登場）・ナイスネイチャ・リオナタールのトレーナー（オリジナル）

菊花賞を勝つも、ゆえあつて雲隠れせざるを得なくなつてから十年。みんな自分の存在を忘れ去つた頃、一人の女性が彼女の元を訪れた。

第四話 冬 キラキラの、キミの隣に

登場…トウカイテイオー・ナイスネイチャ

かつてないほどにグデングデンに酔っぱらっていた同期の告白。

第一話 春…ふつーの里帰り

(ヒシミラクル & トレーナー)

「トレーナーさん、お話があります」

「どうしたミラクル。まるで『実家に帰らせていただきます』って続きそうな気合だな」
「うぐっ。…どうしてせっかく用意しといた話のネタ取っちゃうんですかー！」

「ネタとか知らねえよ。だいたい帰省きせい届を先月出してただろ」

トレーナー室で俺の席の真向かいに座った自分の担当の生徒、ヒシミラクルが頬ほおをふくらませてブーイングするのを眺めてため息をついた。

彼女はつい先週、天皇賞（春）で見事に一着を獲とった。二着の子に迫られるも半バ身かわして勝った。一緒になって表彰を受けたところまでは良かったが、控室に帰った後にウイニングライブのことを思い出した。二人して忘れていたのは大笑いするしかなかったが、大笑いしている場合ではなかった。特にミラクルはすっかり油断しきっていたらしく、レッスンで学んでいたはずのセンターのパフォーマンスを見事に忘れてしまっていた。

『どどどどどどうしまししょうトレーナーさん！ ステージに上がっても手を振るくらいしかできませんっ！ 『NEXT FRONTIER』の歌詞の出だしって何でしたっけ？ 視界全部なんとかかんとか？』

『落ち着けミラクル、それは先週スマートファルコンが熱唱ねつしょうしていた『UNLIMITED IMPACT』の出だしだ。ミラクルが次に歌うのはこっち』

本番までの約二時間で必死になって学園標準振り付け動画を見て動きを練習し、歌詞も覚え直してなんとかライブを成功させた。ライブでは大変堂々としていて、二時間前まで控室で半泣きになって一夜漬けどころではない浅漬けにチャレンジしていたとは思えないくらいの出来映えだった。

帰りに寄ったお好み焼き屋でスマートフォンを取り出してライブ映像を眺めていたら、ジト目のミラクルに『ニヤニヤ顔がウザいです。それでも食らえ!』と焼きたてのお好み焼きを直に口に投入された。口の中が死んだ。仕返しをして共倒れに持ち込んだら『大人気ないですよトレーナーさん……』とさらに睨まれた。

京都から帰ってきた翌日は友達と打ち上げをしていたらしいが、その次の日、そして今日とこの部屋にわざわざやって来てダラけきっていた。ついさっきまで靴下を脱ぎ散らかしてハイパーくつろぎダラダラモードだったのに、急にこつちに来て冒頭に至る。

「とりあえず靴下を履け。ボサボサの頭をちよつとは撫でつける。シワシワの制服も伸ばしてだな……」

「もう! お母さんみたいなことを言わないでください!」

「そうか。そのあたりどうでしょうかお母様」

「トレーナーさんたら何言つて……え?」

『クーちゃん? ちよつとこつちへ』

スピーカーホンモードにした俺のスマートフォンを机の上に置く。電話の相手はミラク

ルのお母様だった。

お説教タイム、スタート。

『クーちゃん、あなたって子は——』

近くにいたら悪いと思つたので、少し離れたところに移動した。この後確実にK・O. されてしまうミラクルのために冷蔵庫からゼリーを取り出して並べ、冷たい麦茶を入れた。

まだ五月の初めだというのにとっても暑い。今年の夏はレースが開けるんだろうか。スマートフォンからひたすら響くお母様のお説教と、アウアウ言いながら反論を試みるもピシヤツと封じられてぐうの音も出なくなっているミラクルの様子を見つつ、これからのレース環境に思いを馳^はせた。

「うう……」

すっかりしよげてしまったミラクルにちよつと同情していると、お母様から呼びかけがあった。

『トレーナーさん、本当にすみませんねえ。ところで連休はお暇ですか？』

「あ、はい、ミラクルさんの大きなレースの後ですし、トレーナーにも半月ほどは休暇があります」

『なるほど。もしよろしければうちに来ませんか？』

「えっ」

「えーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！！！！」

俺の声はミラクルの大声にかき消された。

『クーちゃん、静かに』

「静かになんてしてられないって！　なんでさらっとトレーナーさん誘ってるの！　これじゃ家でのんびりできないじゃん！」

『だからよ。食っちゃ寝して丸くならないようにしなきゃね。家にいる期間のどこかで抜き打ちで来てもらうなり、いつそしばらく一緒に監督してもらうのもいいかもね』

「後半！」

一気にまくし立てたミラクルがこちらを見た。鋭い視線が『ぜったい断れ』と訴えていた。さらにジェスチャーで『もし来たらお好み焼きの具材にする』とも。頼むからお好み焼き用のヘラを空中から取り出したり、それで骨を断つような動きをするな。たとえ天下

のゆるふわ女子高生とはいえウマ娘、何かの拍子に腕力のリミッターが飛んだら本当にそのくらいの力を出しかねん。

三秒考えた。……ミラクル、すまん。

「そうですね……この休みでちよつと旅行しようと考えていますので、その時に少し立ち寄らせていただければと」

「チッ」

『クーちゃん??』

女子高生がしてはいけない顔ベスト三に入りそうな顔でした舌打ちをスマートフォンが拾ってしまったらしく、お説教タイム・リターンズが発生した。このままこのトレーナー室で溶けてもらっても困るので、気合回復用に後でゼリーをもう一個出すか。



お説教の果てにスライムみたいにデロンデロンに崩れてしまったミラクルが姿を取り戻すまでおよそ三十分。冷蔵庫から取り出して差し出したゼリーをほぼ丸呑みにして、それから厳ひたひたかに告げた。

「仕方がないので実家に来ることは許します」

「ドヤ顔で何言つてんだ。さつき家主やぬしさんに『拒否権はない』って怒られたばかりだろ」
さつきのお説教を思い出したのか、ミラクルはとても渋い顔になった。

「むー……、うちに来るなら滞在時間は短時間ですよ短時間」

「その心は？」

「トレーナーさんは先生みたいなものです。先生が生徒の家に来るのは家庭訪問です。家庭訪問は十五分や二十分くらい親と話して終わるものです。だから短時間なら許します」
主張にとっても筋が通っている。

「見事な論理の組み立てだ。論理的文章の追試は不要だと国語の担任に伝えておこう」

「やったー！ ……バカにします？」

「追試スケジュール調整の要請が東で届いているが見るか？」

「あ、アハハハ……」

晴れやかな顔になったり、ジト目になったり、泣きそうになったりと表情がめまぐるしく変わる様子は、毎度見ていて大変面白い。ミラクルの友人二名がなぜかよく、ミラクルがない時にもここに来てミラクルの表情七変化を宣伝するが、『ミラ子のくるくる変わる表情かわいっしょ？』『こういう表情って安心して素の自分をさらけ出せる人にしか見せないんだよねー？』と、意味深長な目配せをしてくるのが必ずセットだった。

それはさておき
閑話休題。

天皇賞の後の特別休暇の最終週は追試に充てていいと伝えることにし、休みが減つてやる気が抜けてまたしても溶けてしまったミラクルに休み期間中のスケジュールを伝えた。

「鬼！ 悪魔！ 英語その他いっぱいの先生！ 私の休みを返せ〜〜〜っ！」

「休みが減つたなら有効に使うのが大事じゃないか？」

大声で嘆き悲しむミラクルに一言アドバイスすると、途端に元気が戻った。

「それもそうですね。……あ、やば、遠征支援委員会の人に取ってもらったチケット明日の朝発だった！ 支度しなきゃ！」

ミラクルはあたふたと靴下を履いてあつという間に出て行った。

俺も旅行に出る準備をしなければ。その前に追試スケジュールを各教科の担任に送って、そしてあと何枚かの書類を片付けなければならない。久々の旅行、大変良いものだ。



諸々の仕事を片付け、旅行に出たのはゴールデンウィーク明けだった。仲のいいトレーナーに旅程を聞かれたので答えたところ、

「あなたってワーカーホリックだったの……担当の子と一緒にのんびりやってるかと思つてただけど」

との言葉を頂戴した。まあ、行った先で地方トレセンや合宿所に立ち寄る行程が挟まっ

ていたら誰だつてそう思うか。

ヒシミラクルのお母様の誘いに甘え、旅行の途中でミラクルが言うところの『家庭訪問』をする予定にしているため、日程はすでに先方に伝えていた。お母様からは何泊するかと尋ねられたが泊まらない。生徒の家に上がりこんで長居してはいけない。

このトレセン学園は、お嬢様なウマ娘のトレーナーとなるとなぜか婚約者になつていたり、そうでなくともわりとトウインクル・シリーズでのパートナーが、引退後にそのまま人生のパートナーになつていたりするのが日常茶飯事の世界だ。人とウマ娘に限らず、人どうしてもコーチと選手が結婚する事例は多々あるものだが、さすがにこの学園だとその事例が多過ぎる気がするし、季節に一回はトレーナーと生徒の正しい関係性についての綱紀粛正のお達しが来るので察するものがある。

このトレーナーからも常々怪しまれ、今回もデートか何かかと突っ込まれたが、こちらら本人称するところの「ふつー」と普通の関係性だし、俺にも相手にもそのような雰囲気も希望も特段ない。……と述べたらゴミを見るような目を向けられた。

「朴念仁ぼくねんじんつてあなたのためにある言葉だね。……ミラ子ちゃんにLANEで入れ知恵しとこうかな」

との言葉も賜^{たまわ}った。俺が何をしたってんだ。というかミラクルの連絡先をなんで知ってるんだ。

ミラクルから伝えられた最寄り駅で電車を降り、待つこと数分。遠くからミラクルが歩いてきた。

「トレーナーさん」

「よう」

「……本当に来たんですね。jee」

こちらをジト目で見るミラクルは、当社従来比でかなり整えている服装だった。いくらトレーナー室でだらけているからと言って、さすがに室内スタイルスリッパ履きジャージファクションで駅前まで来ることはないか。

「その目、絶対に『なんでこいつジャージとだるだるTシャツにそのへんのサンダル姿じゃないんだ』って思ってますね？」

「思っていないぞ？」

「じゃあこの服について感想をください」

むしろ綺麗だとかかわいいだとかいろいろな感想が思い浮かぶが、どう声を掛けたものか。いろいろ考えたけれども、「ふつー」な関係性に似合うのはこの言葉だった。

「すぐにどこへでも出掛けられそうな服装だな」

「ご名答、いつものだらけモードな女子高生とは呼ばせませんからね!？」

「だらけてる自覚はあったんだな……」

ぼちぼち、ミラクルのご実家へ向かうことにした。その道中でも相変わらずミラクルの気が張っている感じがした。

「トレーナーさん、うちへの滞在は何分の予定ですか？ 三分間待ってやった方がいいですか？ それとも四十秒で帰り支度しますか？」

「あの超有名映画かよ。まあまあそう邪険じやけんにするな。お土産があるぞ」

「なんです？」

ジト目でにらんでくるミラクルにまず袋をひとつ渡した。中の包みを取り出して表に書かれた文字を読んだミラクルが首をかしげた。

「いきなり……だんご？ 確かにいきなり目の前に現れましたけど」

「二三日くらい九州を巡っててな。熊本の名物だそうだ」

「へー……」

メイクデビューで行った小倉レース場、佐賀にある地方トレセンと回り、その次に行ったのが熊本の方にあるウマ娘のレースクラブチームだった。古くからの友人がコーチをしており、久々の顔合わせだった。そのクラブチームにはひととき速い子がいた。中学生だそう、今すぐにでもトレセンに勧誘したいくらいの才能だったが、諸々の事情で遅くなるらしい。一応会って挨拶をしておいた。

熊本からさらに宮崎のURA西部合宿センターを訪問してからミラクル邸へ向かった形になる。

「そつちはご家族みなでどうぞ。ミラクルにはこちらも追加で」

バッグからさらにひとつ包みを取り出し、ミラクルの前に差し出す。少々大げさな身振りも添えた。

「これは？」

「山吹色のお菓子です」

「山吹色のお菓子……あつ、ワイロですか？ 昨日時代劇で見ました！」

一瞬考え込んだ後、晴れやかな笑顔で答えにたどり着いたので内心で拍手した。歴史の追試には出ないとは思うが。ワイロを送ったからにはあの決め台詞も言わなければ。

「どうぞお納めください……ククク……」

「えーと、こういう時は……『お主もワルよのう……』」

二人して悪者みたいな笑いをした。

「なんだかわからないですが買収されてあげます。何をご希望ですか？」

「おいしいお好み焼きをひとつ」

「なーんだ！ それならワイロがなくてもいっぱい作ってあげますって！」

「楽しみにしてるぞ」

事あるごとにレース場の近くで客が自ら焼くお好み焼き屋で、ミラクルのセミプロ級（自称）の腕で仕上げたお好み焼きを食べるのが日常の楽しみになっている。まわりからは『餌付け』だと評価されていたがんなわけあるか。ただ、もしミラクルが将来お好み焼き店を開いたら常連になるかもしれない。

「いらつしゃいませ。ようこそお越しくださいました。娘がいつもお世話になっており

ます」

家ではお母様が出迎えてくれた。

「お世話になります」

俺の横でミラクルが手土産を高々と掲げた。

「お土産もらいました！」

「あらあら、ご丁寧にありますありがとうございます」

「いきなりだんごって言うんだって。ゆっくり出してもいきなりだんご！」

妙にハイテンションで、袋を持ったまま笑ってダンスでも始めそうな勢いだった。食べ物世界を救う。

リビング・ダイニングの方に案内されて座る。その向かいにミラクルが座ろうとしたが、お母様に「クーちゃんはあっち」と言われ、俺の隣に来た。向かいにお母様が座り、俺とミラクルがセットで面談を受けに来ているような席配置になった。

「お母さん、なんでこの席？」

「三者面談ですから」

「それならわたしもそっちの席なんじゃ」

「面談するのは私、面談を受けるのがクーちゃんとトレーナーさんよ？ OK？」

「NG！」

「じゃあ始めましょうか」

ミラクルの抗議のシャウトを完全に右から左に流してお母様が話を始めた。

「まずは、天皇賞（春）の勝利おめでとう。今夜はクーちゃんに祝勝会のお好み焼きを作ってもらいます」

「なんで勝った本人が作るの!? まあいいですけど」

「トレーナーさんも是非参加していつてください」

お母様から突然の誘いを受けた。自分が返事をする前にミラクルが全力カットを入れた。

「トレーナーさんは超絶忙しいんです！ あと十分で出発して駅に行かなきゃいけないの！ だから無理、ですよねトレーナーさん？」

ミラクルの笑顔が怖い。『今度こそお好み焼きの具材にする』という圧を感じた。

「うそおつしやい。トレーナーさんからは明日まで時間があると事前に伺っているのよ」
「チッ」

「フンッ！」

ミラクルの凶悪な表情とともに繰り出された舌打ちは、お母様がどこからともなく取り出した巨大ハリセンによつて制裁された。

「あいたあつ！ ぼーりよくはんたい！」

「うちの娘がすみませんねえ」

とても朗らかな家だと思いつつ、次なる話題に備えた。

「さて、話がすっかりずれましたが、クーちゃん……ヒシミラクルの勝利はトレーナーさんのご指導あつてのこと。今一度御礼申し上げます」

「いえいえ、ミラクルさんの持つ実力があつてこそです」

「こちらで『そーです！ わたしの力です！ えへん！』と合いの手を入れてくるはず……と思つたら何もなかった。横を向くとミラクルが顔を真っ赤にしていた。なんでだろうと思つてお母様の方に視線を戻すと、とても慈愛あふれる表情でこちら側二名を見てい

た。お母様はうんうんと頷うなずき、話を進めた。

「いずれこの子が引退する時、おそらくはレースの世界ではなくて別の世界、それこそ一般企業で仕事をしていくのが、本人から常々聞いたり、私が日々触れ合っている中での感想です」

「なるほど……」

確かに、自称「ふつー」のウマ娘のヒシミラクルが、この先ドリムトロファイリーグで走り続けるような感は、日々の会話でも特に見られず、体力的にもさすがにそこまでは行かないだろうというのが見立てだった。総合スポーツ競技の「U・A・F」で活躍する道もあまり考えられず、それこそお好み焼き店を仕切るセミプロ店主などが一番特技を活かせる道かもしれない。

「トレーナーさんはどう思われますか？」

「そうですね……。一番はヒシミラクルさんの希望ですが、やはり特技を活かせると思います。持久力、諦めない強さ、お好み焼きの腕など——」

「最後のいりますか？」

「ようやくミラクルからのツツコミがあった。」

「そりゃあ自称セミプロですけど、その腕を活かすような仕事ってどこかにあるんですか？」

「「お好み焼き屋さん」」

ミラクルからの問いに、お母様と俺の声が重なった。

「あら、トレーナーさんも同じ意見のようで」

「ふと思いついたので」

「もう、二人して……」

ミラクルの緊張がようやく解けたのか、笑い始めた。

夕食はミラクルのお父上も加わり、ミラクルが存分に腕を振るうお好み焼き大会になった。

「レースで遠征するたびに焼いていたのでだいぶ上手くなりました。セミプロ五段ですわね！」

「プロになる気は？」

「そうですね……可能性のひとつとしては、あり得なくもないかも、ですね」

「その時はトレーナーさんにお店の会計事務を依頼すべきね」

お母様の言葉にミラクルの顔が一気に真っ赤になった。

「え、あ、う、こ、これでも食らえーっ！」

焼きたてのお好み焼きを口に突っ込まれた。口が死んだ。

「ご両親揃つての『泊まっていけないか？』とのお誘いを固辞し、今日の宿へ向かう。途中、駅までミラクルが送ってくれた。

「トレーナーさん」

「どうした。今口が超やけどで喋れないんだ」

「喋ってるじゃないですか」

くすくす笑う声が聞こえた。

「えつと……もしこの先引退したら、なんですけど」

「ああ」

「一応、次の学校には行きますよ。ふつーの大学なのか、ふつーの専門学校なのかはまだ決めてませんけど」

「ま、ゆつくり考えるといいさ」

「そうですね。……で、もし、調理系の専門学校に行つて、修行して、お好み焼き屋さんを開いたら、トレーナーさんに味の審査をお願いしたいなつて、そう思います」

「そうか。その時は呼んでくれ。辛口審査で厳しく査定しよう」

「そこはお手柔らかにお願いしますね？ あとせつかくなら常連になつてください」

「はいはい。でも店が遠くなると大変だな」

「……大丈夫ですよ。すぐ通える範囲にお店を作りますから。何なら距離ゼロメートルでもいいですよ？」

そう言うと、ミラクルは俺の前に出てきて顔を覗き込み、不意に心奪われるような笑顔を見せた。

「これからもずっとよろしくお願いしますね。トレーナーさん？」

第二話 夏…夢破れ、でもその先に道がある

(オリジナルウマ娘&ゴールドシップ)

高等部二年の夏の終わり、私はトウインクル・シリーズを引退し、学園も辞めて故郷に帰ることにした。今年最後の未勝利戦が終わるこの日まで、レースで勝利を飾ることができなかつた。

ここまでに一勝もできなかつたら引退する。これは最初から自分の中での約束として決めていたことだけど、いざ目の前に行ってみると寂しくもあつた。トレーナーや同級生のみんなは引き留めてくれたし、親も応援してくれた。最高で一バ身差の二着まで取れたんだから、あと一息だと。でもその一息先に達することができないまま、デビューから二年の

時が過ぎた。

転校手続きを終えてみんなとお別れの挨拶もして、荷物も送り終わり、いよいよ明朝この栗東寮を退去する。同室の子はもういない。私と同じように学園から地元の高校へ編入学することになっていて、彼女は半月前にここを去っていた。

最低限の着替え以外手元ないので、今夜は寮のゲストルームに泊まらせてもらうことになっていた。だからこの部屋自体とはあとちよつとでお別れ。中等部から通算して四年半、結構長くここにいた。

ふと思いついて外に出て、部屋の外の名札差しに入っていた名札を取った。

『アクアナイト』——私のウマとして授かった方の名が書かれた札を取り去ると、二人分の名札差しはからっぽになった。そう遠くないうちに、また新たな子がこの部屋に来るだろう。この部屋の次の主こそはG I ウィナーになってほしいなと思った。

たった一人、がらんどろになってしまった部屋の床に座り、ベッドにもたれかかってしんみりとしていたら、ドアがノックされ、開いた。

「よう、アクアちゃん」

ゴールドシップさん、在学中とてもお世話になった先輩だった。

「夜遅くだがちよつとツラ貸しな。寮長には夜間外出許可を取った」

もう夜遅かったけど、ゴールドシップさんの誘いに乗ることにした。先輩は事あるごとに規則の外を盛大に暴走する人だったけど、今回は本当にきちんと許可を取っていたらしい。玄関のところにフジキセキさんがいて、書類に私がサインしたら手を振って送り出してくれた。

外は月明かりでだいぶ明るかった。毎日のように続いた酷暑のせいで涼しく感じられたけど、よく考えれば普通に蒸し暑いくらいの温度と湿度だ。

しばらく歩いてみると、ゴールドシップさんが不意に話しかけてきた。

「アクアには入学前に焼きそばの味見をもらったよな。あれが最初の出会いだった」

「! ……覚えてらつしやるんですか!？」

「あたぼうよ、アタシの焼きそばに率直そうちよくな意見をくれた。あれは中華鍋の底で両側から殴られた思いだった。もし感想をもらってなかったら井の中の蛙かわずになつてたところだつたぜ」

あれは五年前、小学六年生の時にファン感謝祭に来て、たまたまゴールドシップ先輩に呼び止められたのが初めての出会いだった。

『その少女よ、最高の焼きそばを試食する権利をやろう、フォッフオッフオッフ』
突然声を掛けられて、勧められるままに目の前に盛られた焼きそばを一口食べた。

『へんな味……』

今にして思えば学校の先輩になるような人にかなり失礼な物言いだったかもしれないけど、あの時はなぜか口からもれてしまった。

『ガンっ！』

そう言うや否や、ゴールドシップさんはスプリンターズステークスの展開並みの速さで屋台を撤収し、『最高の焼きそばを作る修行に出る！ さらば！』と言い残し、ゲートを出る勢いさながらのスピードでトレセン学園を出て行ってしまった。

あつけに取られていると生徒会の人に来て、『ここでゴールドシップ——長身の見てくれはいい生徒が焼きそばの屋台をしていたと思うが、何か見えていないだろうか』と尋ねられた。さっきの光景を証言すると。その先輩はあつけに取られた顔をして、『そうか……あのゴールドシップも自省して旅に出ることがあるのか。情報感謝する』とお礼をされ

た。後からその人がエアグルーヴさんだと知った。

その日以来ずっと、ゴールドシップ先輩の印象が強烈に残っていた。学園に無事入学できてからはゴールドシップさんの姿を時々目にしたけど、だいたいいつもエアグルーヴさんに追いかけていた。

「次の年の入学式で見つけたときさ、早速麻袋に詰めて拉致ろうと思ったんだよ。でもうちのトレーナーに止められたんだよ。新入生を攫うな、そもそもまだ新入生はチームに加盟できない、って。……だからと言うのも変だけど、同じ時期に来た別の転入生拉致ってチームに放り込んだんだけどな」

「そうだったんですか……」

思わぬ言葉に心がはねた。入学してすぐの時から、ゴールドシップさんは私を見つけてくれていたんだ。

「アクアちゃんの名前を調べて、半年経ってチームに入れられるようになったらすぐ引きずり込もうとしたんだが、タッチの差で別のトレーナーがついちゃまった。すぐにトレーナー契約ができるのはすごいと思ったし、横からかつ攫うなんてできないから、出会った

ときにちよつかいをかけることにした」

「アハハハ……」

私は同期の中でもかなり早い段階でトレーナーさんと契約できた。結局一度も勝てなくて申し訳なかったけど、トレーナーさんからは初めて会った時からずっと『君には力がある』との声をもらっていた。まさに今日会った時も。決して単なる掛け声じゃなくて、トレーニングの成果をもとに理論的に説明してくれた。

そんなトレーナーさんとメイクデビューに向けて一緒にトレーニングを始めた頃に、ゴールドシップさんとファン感謝祭以来初めて対面し、いきなり土運びを手伝わされた。運んだ土をダートのへこんだところに入れ、最後にローラーでならす作業だった。綺麗になったダートコースをバ場状態の確認と称して一緒に走った。ゴールドシップさんは入りたての中等部の生徒相手であっても決して手を抜かず、もちろんまったく勝負にならなかった。へとへとになった私の肩をパーンとたたき、

『これで完璧！ ありがとな！』

との声を残して風のように去っていった。

それから、ゴールドシップさんに出会うたびにいろいろなものを運ぶ手伝いをしたり、

プールに散らばった水晶の原石の山をかき集めたり、ちくわの穴の食べ方をぜんもんどう禅問答したり、いろいろと面白いことをした。初めはやる意味が分からなかったけど、全部あとで力になったことが分かった。もちろん、自主練の時にフォームを直してもらうなど、基礎トレの手伝いもしてくれた。

トレーナーさんの指導との相乗効果で、実際、力は平均よりもかなり高くなったと思う。でも、あと少しのところまで勝利には届かなかった。勝てなかったのは二人のせいじゃなくて自分の力不足。本当なら入った瞬間に終わってしまっていたはずのところを、ゴールドシップさんとトレーナーさんが一応デビューできるところまで引き上げてくれたんだと思う。

いろいろ話しながらだいたいぶ歩いていたらしく、気がつくとも小さな公園に着いていた。

「よし、ここだここ。都会にしちゃ星がきれいに見えるだろ。この場所を知ったのはアタシの手柄じゃなくてアヤベが話してたのを聞いたただけだな」

そこは空が開けており、星がいくつも見えた。

「やっぱり、街だと見える数は少ないですね」

「アクアの故郷だとどのくらい見えるんだ？」

「もう、空いっぱい星で埋め尽くされていますよ」

「アタシの故郷も結構星が見えるぞ、何個見えるか勝負しねえか？」

「星、数えきれないほどあると思うんですけど……」

「それを数えるのが集中力向上のトレーニングつてもんよ。ちなみにアタシは合宿所の山中で十万三千五百五個まで数えたところで夜が明けた」

「あはは……」

時々変わったことをいうのがゴールドシップさんらしかった。

「じゃあ数えるぞー、スタート！」

ゴールドシップさんは芝生に寝転がり、真剣な目をして夜空をじつと見上げた。目が細かく動いているところを見ると、本気で星を数えているに違いなかった。それを見習い、私もその横に寝転がって、星をひとつひとつ数えはじめた。

星の明るさの測り方はいくつかあるけれど、地球から見たときの輝きによってつけるのが有名だ。星には明るく見えるものもあれば、暗く見えるものもある。明るい星は都会でも目立つけど、暗い星は都会ではなかなか見えない。

トウインクル・シリーズでの私は、さしずめ暗い星だったのだろう。強いウマ娘の明るい輝きには遠く及ばなかったけれど、でも、それでも、そこにいた。

「アクア」

「はい」

「自分で言うのもナンだが、アタシはあんまり人の面倒を見ないんだ。チームメイトの世話はするけど、それ以外で個人的にいろいろやってたのはアクアだけだ」

その話は意外だった。

「どうして私に？」

「何だろうな。やつぱり初対面できちんと意見をくれたところかもしれないねえな。アタシは意外と恐れられて、というか避けられてきて、面と向かって色々言ったり、一緒になつていろいろやってくれる連中がなかなかない。それこそトレーナーと、今のチームメイトと、アクアくらいか。付き合いの良さから行けばアクアが断トツだな」

「そうだったんですか……」

確かに思い当たる節はあった。ゴールドシップさんは色々な意味で超越した存在で、多

くの人は好奇の目で遠巻きに見るか、その強さに恐れをなすかしていた。友人達からも『あの破天荒な先輩によく付き合えるね……』と感心されたり呆れられたりした。

「実際さ、アクアは強かった。アタシが言っちゃうとただのなぐさめにしか聞こえないかもしれないけれど」

「……トレナーさんがデータ付きで解説してくれたので、自分がどれくらい強さだったかは分かっているつもりです。トウインクル・シリーズでは及ばなくとも、少なくともアスリート寄りの進路は普通に取れる、と」

「だな。たとえば地方トレセンで走ったり、あるいは地域のレース団体で活動したり、ウマ娘向けのクラブチームのコーチとか」

ゴールドシップさんにいろいろ挙げてもらうと、意外と道があると改めて認識できた。「私はひとまず普通科の高校に編入学することになっています。その先はまだ決めてはいませんが、ゴールドシップさんの話を聞くと、そういうスポーツにかかわる方面に進むのもいいかなって思えてきました」

「せっかく力があるんなら、活かした方が人生豊かになるしな」

「ゴールドシップさん、まるで先生みたいですね」

「ま、たまには先輩風を吹かせてみたくなつたつてわけよ」

「ふふ……ありがとうございます」

「おう」

しばらくして起き上がり、またとことこと歩いて栗東寮に帰った。お互いに特に喋りはしなかつたけれど、眠りつつある街のかすかな音と静けさが心地よかつた。

翌朝、寮住まいの友人と寮長のフジキセキさんに挨拶をして、寮を出発した。もしスポーツ系の道に進んだら、またここに戻ってくる日が来るだろうか。最後にトレセン学園を眺め、空港に向かつた。

☆ ☆ ☆

あれから数年が経った。私は大学でスポーツ系の学科に進学して、ウマ娘のスポーツ科学について学び、卒業して地方トレセンでサブトレーナーとして勤務している。教え子がトウインクル・シリーズの選手達との交流戦を制したことで、私達のトレセンの名が全国的に有名になった。そのおかげか、こちらに進学するウマ娘の子達も増え、観客の方々も昔よりはるかに増えた。

今週は中央トレセンとの交流が開かれていて、今日はそちらから特別ゲストが来るとの話だった。ただ、予定時間が近くなっても、そのゲストが現れる様子がない。中央トレセンの広報窓口を確認したら、一時間前にホテルを出たと連絡を受けたらしかった。心配になつて捜索手配をしようか考えて外に出ると、同僚のトレーナーから声を掛けられた。

「アクアさん、今回の交流イベントで何か飾り付けをする予定ってありましたっけ？」

「いえ、特にありませんけど……」

「あの、あそこについての間にか人形が立ってまして、誰かが立てたのかなって」

彼が指差す方を見ると、ファストフード店で見るとよくなおじいさんの像が立っていた。

朝はなかったはず。彼と話し合い、どこか片隅にどけておこうかと思つて視線を向けると、人形が消えていた。

「あれ？」

首をかした瞬間、後ろから肩を叩かれた。

振り返ると、その人形がいた。

「きゃっ！」

思わず後ずさると、その人形がいきなり自身の顔に手を当て、ペリペリと顔の表面——マスクをはがしていった。そこに、見慣れた顔が現れた。

「よう、アクア。久しぶりだな」

「ゴールドシップさん！」

思わず飛びつくように抱きついてしまった。しばらくして、その一部始終を同僚のトレーナーや教え子達に見られていることに気付いて、ちょっと恥ずかしくなった。

特別講師のゴールドシップさんの謎の語りは、生徒だけでなくトレーナーや教官陣にも大好評だった。聴く人みなを引き込む語り口はとても心地よく、その後の実戦トレーニングも生徒達やトレーナー達に良い発想をもたらしてくれた。もちろん私も改めて大いに学べた。

その日の夜の夜懇親会で、久々にゴールドシップさんと直接いろいろ話げできた。

「アクアちゃん、すっかり先生だな」

「だいでコーチ活動には慣れました。今のチーフトレーナーからも『そろそろトレーナー試験に挑戦できるだけの理論と実践指導力が身についたはずだ』と、受験を勧められています」

「それは何よりだ」

「ゴールドシップさんは学園でお仕事を？」

「いんや。流しのウマ娘をやつてる。今回はちみつこ理事長じしやう直々の命で学園の仕事を引き受けて来た」

「さすが、破天荒なのは相変わらずですね……」

「半分は久々にアクアに直接会いに行くのが目的だったんだけどな」

「ありがとうございます！」

帰り道は途中までゴールドシップさんと一緒だった。

「ゴールドシップさん」

「なんだ？ もう一軒行つとくか？」

「そちらは遠慮します……」

「そっか」

しばらくの静寂。

「……ゴールドシップさん。私の夢は一度は破れました。でも、あの学園で過ごして、学んだことは決して無駄ではありませんでした。学んだことを活かす新たな道を示してくれるのはゴールドシップさんです」

返事は特にはなかった。

「おかげで、今とても充実しています。いつか教え子からG I級の子が、ゴールドシップさんみたいに強い子が出てくれるのが楽しみです」

「そりゃあいいな」

「——ありがとうございます。そして、これからもよろしくお願いしますね」

最後にお互いの拳を軽く合わせた。

翌日、お土産を大量に抱えたゴールドシップさんを駅で見送った。無事に忘れ物をせず

に帰り着けるかちよつと心配だったけど、ゴールドシップさんなら大丈夫だろう。

明日日曜日を過ごしたら、また新たな一週間が始まる。次にゴールドシップさんに会う時には、一回り成長していようと誓った。

『夏…夢破れ、でもその先に道がある』 完

第三話 秋…十年目の再会

(リオナタール&ナイスネイチャ&トレーナー)

都会に遊びに出かけた帰り道、ちょうど街中のコマーシャルビジョンからは、明日行われるトウインクル・シリーズのGⅠ級競走の特集番組が流れていた。

クラシック路線の三冠最終戦・菊花賞。今年も実力、そして運を味方につけて選ばれた最高の十八人の頂点を決めるレースだった。そのレースは私にとってはとても懐かしく、一方で、心をちりちりと灼^やき続ける苦しみでもあった。私がかつて、その栄光を手にしたことがあった。しかしそれももう昔の話だった。おそらく私のことは誰も覚えていない。忘れ去られるよう自ら努力した成果ではあったが、やはり寂しかった。

少し古びたアパートの一室に帰り着き、荷物を下ろしてそのまま座椅子に深く腰掛けた。ため息。そのままたつ机の天板に倒れ込むように横になり、少し視線を上げた。忘れられない過去の私の証、菊花賞優勝記念の選手メダルと表彰状が半ば物に埋もれながらそこに佇たたずんでいた。

「〇〇年 優勝 リオナタール」

菊花賞で優勝した時、家族はみんな我がことのように喜んでくれた。家計が苦しい中、トレセン学園に送り出してくれて、ずっと応援してくれた恩を、ようやく少しは返せたかなと思った。

でも、運命とやらはあまり私には優しくなかった。悪い奴に騙された父親は多額の借金を背負わされ、ある日家を去った。死んだという知らせは聞かないので、この広い空の下、どこかで生きているには違いなかったが、もう十五年、噂のひとつも聞くことはなかった。

母は気苦労から心身を病み、長く病院で療養している。今日もお見舞いに行つて、久々

に少し笑ってくれた姿を見ることができた。

私も雲隠れしなければならなくなり、トレーナーと理事長、理事長の秘書さんの助けで都会から遠く離れた地に逃れた。みんなを危険から遠ざけるため、それからさらに三、四回転居して携帯電話の番号やメールアドレス、メッセージアプリのIDも全部変えたため、今ではUR Aも私の居場所を知らないに違いなかった。唯一私の居場所を知っているのは母が入院している病院だけで、もちろん情報管理は徹底されているので漏れることはない。

逃避行を始めて以来、ウマ族として授かった名は封印し、ヒト名で貫き通した。世の中ヒト名しか名乗らないウマ族は結構多く、そこは問題にはならなかった。最初の方こそ「あなたもしかして……」と問う人も多かったが、『とても似てるってよく言われます』とドッペルゲンガー説を使って返したらみんな引き下がった。あるいは、ウマ名を名乗れない事情を察してくれたのかもしれない。

GIで勝利して名を馳^はせた一人のウマ娘が不意に消えても、いつしか忘れ去られて変わりなく回る社会の中で今日も生きる。多くのものを失ってしまったけれど、ひとまず命と身体と家があつて、小さな職場で少しずつお金を稼いでいるだけでもよしとしよう。

夕刻。そろそろ近所のスーパーで見切り品が出始める時間だった。休みの日は自炊をすることもあるし、明日は問題なく全休だったが、少し疲れていたのでスーパーの惣菜部の神の手に頼ることにした。徒歩五分のところにあるスーパーは多くの客でごった返している、見切り品も争奪戦こそ起こらないものの、気を抜くとあつという間にかき消えてしまう。幸い、一番欲しい惣菜は入手できた。それからいくつか買いい足して入口を出たら、外は天気予報にない通り雨が降っていた。走って帰ってすぐにお風呂に入れば身体を冷やすことなく間に合うか。

荷物を整え、駆け出す準備をしたとき、不意に自分の横の方から声がした。

「あちゃー、雨になっちゃいましたかー……」

長く伸びた、天然パーマ風の暗い赤めの髪。仕事帰り風のパンツスーツ姿で、その人は困った顔をして立っていた。頭上の耳、そして尻尾から、彼女もまたヒトではなくウマ族であることは明らかだった。

「ま、アタシは折り畳み傘を持っているので。そちらのお姉さんはどうです？ 近所なら送りますよ？」

「あ、いえ……」

「まあまあそう言わずに。ようやく会えたんだから」

突然不思議なことを言い始めたその人に少し驚き、ちよつとあやしく思えたので心持ち身構えた。彼女は私と目を合わせて微笑み、まるで何かを思い出させるかのように、自身の髪を一束分手に取り、頭の横のところに当てた。髪が思いきり膨らんだ状態で、まるで応援の際の手作りポンポンのようだった。——そして気付いた。

「お姉さんつて言うのも変だよ。同級生だし、むしろアタシの方が九日だけお姉さんなんだからさ……久しぶり、大川莉緒さん。いえ——リオナタール」

「ネイチャ……」

彼女——同期のナイスネイチャは、私のヒト名と、長く封印していたウマ名をともに呼んだ。

そのまま別れるのも忍びないので、家に招くことにした。いつもなら誰かを家に上げることは決してしないけど、自分の昔のことを知る友人に久々に出会えたことが、無意識のうちにならした行動をさせたのかもしれない。

「おじやましまーす」

「散らかつてごめん。ベッドのあたりにちよつと座つてて」

「こちらこそごめんね。これで散らかつて言つたら、ネイチヤさんちはゴミ屋敷になつちやいますねー」

「そうなんだ。ネイチヤはいつも部屋を綺麗にしてる感じだったから」

「夫婦で仕事が忙しいと大変よー」

ネイチヤは笑いながら答えた。ネイチヤが自分のトレーナーと結婚したのは聞いている。あれは公開告白というかお互いに掛かつて自爆したようなものに見えた。翌日から一か月、学園近くの商店街と小倉の商店街が出血大サービスの割引をして全国ニュースにまでなつたのも覚えている。

「リオはどう？」

「しばらくはフリーランス？ つてやつでプログラミングっぽいことやつて、今は小さいIT企業で働いてる」

「なるほど」

それを聞いたところでネイチヤはふと沈黙し、何かモジモジし始めた。

「トイレ?」

「……え、あ、そそそそそそう! お借りしたいです!」

「その右側の扉」

「ありがとう!」

ネイチヤがトイレに飛び込んでいった。彼女は別にトイレに行きたかったわけじゃないのはバレバレだった。……彼女がどうしてこの街を訪ねてきたか、人づてに聞く彼女の仕事からだいたいわかる。

「……そろそろ潮時かな。ここを引き払うか、いつそ表に出てしまおうか……」

トイレから戻ってきたネイチヤが相変わらずモジモジしているので、今度は話を促す^{うなが}ことにした。

「ここに来たのは偶然、つてわけじゃないよね」

「それは……」

ネイチヤの目があからさまに泳いだ。昔から嘘つくのが下手だったよね。

「私も偶然見つかるような適当な隠れ方はしてなかったからさ。何か頼まれて来たんでしょう?」

「……お見通しデスカ」

「ネイチャがわかりやす過ぎるだけだと思う。そこがネイチャのいいところだけだ」

「降参します」

ネイチャが分かりやすく両手を上げた。

「よろしい」

私かわざと低めの声で厳おしかに返事をする、ネイチャは苦笑しながら話を始めた。

やはり、URRは私が行方をくらませた後、かなり長く探していたらしい。ひとつは、仮にも著名なGIRRESを制したウマ娘が消息不明とあって、常々国民や海外のウマ娘関係の団体から突き上げを受けていたから。また、最近また有名人を狙った犯罪が多発している、私の身柄を悪用される国際的犯罪のリスクが跳ね上がっている事態を問題視していたから。そして何より、学園理事長がとても心配をしていたからしかなかった。

「しかしここまで十年以上隠れおおせるなんて、リオはスパイみたいだね……」

「最初の頃は自分と家族とまわりの人の命が懸かってたからね。ここ何年かは意識的に隠れるアレはしてなかったんだけど、みんな気を遣ってくれてたのか、それとも忘れちゃっ

てたのか」

「みんなリオのことは覚えてるんじゃないかな。いくらドッペルゲンガーのふりをすると
言ったって、顔も声も体型も九九・九九パーセント同じ人が本人じゃないって言い張る
というのは、よほどのことがあるって察すると思うなー」

「そうだね……」

「……ごめん。実はリオの会社にはもう話を聞きに言ってたんだ。はじめは社長さんがリ
オの存在を悟られまいと隠し通してたけど、いろいろ説得して、最後は話してくれた。

『ゆえあって隠れていらつしやるならば、それを支援するのが私の務め。そして、私はG
Iウマ娘というより、腕の立つ優秀なITエンジニアとして高く評価しているので、過去
を明かさねないならば、あえて聞き出すこともありません』って。かつこよかったー、
ウチの夫の次に」

「しれつとのろけるな。そつか。あのホニヤホニヤ社長って結構男前な性格だったんだな

……」

「辛辣しんらつかつ！」

とてもかつこいいじゃない。せつかくならいつでもその雰囲気を出してくれたら、うち

の会社はもつと世の中をうまく渡り歩いて商売ができるんじゃないかな。

「でも良かったじゃん。上司に恵まれたね」

「うん。……あと三十歳若くて独身だったら告白したかも」

「フフッ。これは乙女の波動の予感ですか？」

「それはない。茶化すなこのメロメロアツアツカップルの片割れ。ネイチャを寝取つてトレーナーのことを忘れさせてやろうか？」

「寝取つ……いやそれよりもアタシの方を寝取るんかっ!? 夫じゃなくて!」

「トレーナーを寝取つたらネイチャにどこかの海に沈められてあの世一直線じゃん、だったらネイチャ自身とやつてしまった方がいいよね？」

「——信じて送り出した清楚なアスリートのリオが下ネタをさらりと口にするエロ娘に……ヨヨヨ……」

「近所のお節介おばちゃんキャラかよ……」

☆ ☆ ☆

だいぶ話が横道に逸れてしまったので元に戻した。ネイチヤいわく、父親に借金を背負わせた組織は警察の捜査によりつぶした、隠れる必要はもうなくなつたと思われる、とのことだつた。

「UR Aとしてはリオの健在ぶりを大々的にアピールして、いろいろなところからの批判や懸念を払拭ふつしよくしたいみたい。でも、そうしたらしばらくは取材が殺到しそうだと思ふし、たぶん今みたいな静かな暮らしは難しくなる」

「そうだよね。確かにめんどくさそう」

「どうする？　今のところUR A側でリオの居場所を知ってるのはアタシと理事長とたづなさん、そしてトレーナーさん——アタシの夫だけ。UR Aに『リオはいなかった』と報告したら情報は握りつぶせる」

「そう……」

少し考えた。UR Aに伝わらなければ、私はまだしばらく今のような暮らしができる。

ただ、UR Aは私の捜索を諦めないだろう。もし家ごと行方をくらませたとして、次に私

を発見してやってくる人間が、ネイチャほど話が通じる可能性はかなり低かった。……そして、最後に世話になったトレーナーに、きちんと会いたかった。

「……わかった。隠れるのをやめて表に出る。ただ、念のため社長には伝えていい？」

「ほんとう!? 良かったあ〜……」

「なに泣いてるのさ」

「UR Aの理事のオバハンからネチネチ言われなくて済んで嬉しいのが99パーセント、あとは……リオほどの子がこのまま世の中から埋もれて忘れ去られてしまわなくて良かった、って」

「理由の99パーセントが世知辛すぎる……」

休みの夜ながら社長を叩き起こして情報を手短に知らせた後、ネイチャと打ち合わせをした。早速ながら明後日月曜日に学園で関係者との打ち合わせ、水曜日に報道発表の手はずとなった。

月曜日、学園でネイチャ、理事長、たづなさん、そして私の元トレーナーと再会した。

トレーナーは私を見るなりポロポロと涙をこぼして抱きついてきて、危うくその大きな胸

で押し潰されて窒息するところだった。

「トレーナー、涙で化粧がぐちゃぐちゃ……」

「だって……だってえ……」

「……ごめん。心配かけた」

私が謝るとさらに泣き出してギリギリ絞めあげるような力で抱き締められてきて、今度こそ昇天するかと思った。ウマ娘より力が強いヒトのトレーナーって何だろう。トレーナーは今では中堅のチームトレーナーとして、十人ほどのチームを指揮しているらしい。

「トレーナーのこのチームすごいね。過去所属も入れてGⅢ級まで行った子がいっぱい」

「ふふん。もつと褒めてくれてもいいよ！」

「調子に乗るのは相変わらず」

「……でも、GⅠに出られたのはまだ二、三人くらいで、そこで勝った子はいない。私にとつても、チームを組む前に教えていたリオが、今のところGⅠで勝った最初で最後の子」

「そっか……」

水曜日の段取りについて打ち合わせて、夜はネイチヤ、そして元トレーナーと三人で飲みに行った。私はソフトドリンクだけで行き、ネイチヤとトレーナーがお酒を頼んだけど、トレーナーはビールのジョッキ半分もいかないうちに出来上がってしまった。そして私に超絡んできている。

「ねえりオしやうくん、一緒にコーチャってよろしく」

「もう六回目。さすがにうざい」

ウマ娘のパワーを使つて強引に押しつけて離さないと永久にくつついていそうなくらいの怪力だった。ただ、それをやった瞬間、目に涙をためてえぐえぐ泣き始めた。

「うわーりオにきらわれたくしく」

「めんどくせー……はいはい嫌つてません嫌つてません」

そんな様子の私とトレーナーを、ネイチヤがニヤニヤ度一万パーセントで眺めていた。

「アツいねおふたりさん」

「熱量が十対ゼロだけどね」

「十はりオの方？」

「んなわけ……ある……かも……もしかしたら、うん」

「おやおやおやく、トレーナーさん？ リオちゃんトレーナーさんのことが大好きだそうですね？」

「ほんと!? 結婚しよ! 同棲どうせ! 毎日イチャイチャ!!」

「寝言は寝て言えセクハラ大魔神」

「うう……あ、もしかして付き合ってるヒトがいる? わかった。相手の居場所を教えてください。海に沈……コホン、『おはなし』をしてリオをうばいとる」

「カレンチャンの言葉を物騒な使い方すな。うざいくらいヤンデレじゃん。ネイチャ、これでちゃんと生徒指導できてんの?」

「アタシのところに来る生徒からのトレーナー評価アンケートには超高評価なコメントが続々だったね。でも『ウイスキーボンボンを食べた後にやけにベタベタしてきた』とか『毎回口説かれて、ヒト女性トレーナーとウマ娘の学生で幸せな結婚ができるのかつい考えてしまう』とかいう際どいコメントもあるね」

「このトレーナー、生徒に手を出す前に牢屋ろうやにつないだ方がいいんじゃない?」

「そうだねー、それも考えたけど、リオが面倒見てくれたら解決しそうな気がしてねー」

「ネイチャあなたベロンベロンに酔ってる?」

「酔ってるかもね?」

ネイチャがそばにあつたお酒の四合瓶を持ってひらひらと振る。その顔色に変わりはない、酔っていると自称しつつ受け答えもいつもと変わらず完璧だった。

「うわばみめ……」

「よく言われる」

「ねえ、そのナイスねーちゃんとはばかり話してないでわたしとはなそうよ」

「ナイス『ネイチャ』ですよ? トレーナーさん??」

「落ち着いてネイチャ、その瓶を振り下ろしたらネイチャが牢屋行きになるから」

学園近くのホテルまでの帰り道、トレーナーと二人きりになった。相変わらずトレーナーはベロンベロンになっていて、鞆かばんの中から発掘した免許証かばんに書いてあつた住所まで行くのが大変だった。そのまま引きずって行くとトレーナーの靴がすりおろされて消えそうだったので、お姫様抱っこをして走った。たとえ自分より身長が高めとはいえ、ヒト一人を抱っこして走るの、ウマ娘にとっては身一つで走っているのとほとんど変わらない。

ヨッパライを揺さぶって部屋の番号を聞き出し、マンションの玄関を開けさせてから部屋まで運び込んだ。水を飲ませてベッドに寝かしつける。

「うーん……」

「とりあえず酔いが覚めるまで横になって。無理に風呂に入ったら転んだり溺なほれたりするから」

「ありがとおかーさん……えへへ……」

「母親じゃない」

「あ、そうだ、リオちゃんだった」

「そうですよー。じゃ、帰るから」

「ばいばい！ あ、そうだ」

何かを思いついたようなトレーナーがとことこと近づいてきて私を振り向かせ、その直後に唇を奪われた。

「なっ……」

「どくしんつていつてたよね？ 結婚、ほんきだから」

「……酔いが覚めても気が変わってなかったらまた教えて」

予想外ではあったけど、まあ、悪い気はしなかった。素面シラフでまた言ってくれたら……揺らぐかもしれない。

水曜日、記者会見の日。控室でトレーナーと会った。私を見た瞬間耳まで真っ赤にして一瞬俯うつむいたけど、すぐにこちらに向かってきて、耳元で囁ささやいてきた。

「一昨日はごめん……でもあれ、結構本気だから……」

「そう……」

こちらにも急に恥ずかしくなったので、トレーナーの耳元で囁き返した。

「会見の後、夜にでもいろいろ話そ？ ……今後の生活のこととか……」

「え、あ、はい、ヨロシクオネガイシマス……」

二人してどぎまぎしていると、後から来たネイチャに全てを察されてしまった。ニヤニヤ顔で「お幸せにく」と言われたので、後でネイチャとネイチャのトレーナーがいる時に煽あおり返そうと思う。

会見会場では大変な驚きをもって迎え入れられた。それもそうだった。過去十数年では

とんど無いG Iウマ娘の失踪しつぞうと十年後の再発見は、一時的とはいえ大きなニュースになる。会見では事前に打ち合わせた通りのことだけを話し、その打ち合わせの範囲内での質疑応答をした。

会見が終わると、部屋の外も建物の外も、学園外にすら人が詰めかけていた。なんとかその包囲網を抜け出してアパートに一旦逃げ帰った。さすがにこちらにまでは記者やカメラマンは来ていないかと思つたが、そういうわけでもなかったらしい。近所の老夫婦が道端にいて、おじいさんの方が「変なヤツは追ひ払つといた」とぶつきらぼうに返事をくれたのでお礼をした。

夜にまたこつそりと家を出てトレーナーと合流し、あらゆる人の裏をかいてファミリーストランに行った。お客さんがみな一瞬こちらを見て驚いてたけど、そつくり度イレブンナインの赤の他人という振る舞いで押し通した。

「どうしようリオ、私もう顔が緩んじゃって、しつかり抑えてないとそのまま崩れそう」「そう。じゃあ養生テープでぐるぐる巻きにしようか?」

「ワイルド! でもそれもいいかも……」

「マジトーンで言わないで。普通にドン引きだから」

「引かれた……」

ファミリーストランの喧騒の中、色気も何もあつたものじゃないけど、お互いに新たな人生の門出を祝つた。

それからしばらく、あちこちから取材の申し込みがあつたらしいけど、そのほとんどは U R A、主にネイチャが捌いてくれ、さらに会社入口でのパラツチ的な取材も社長の謎のコネで追い払われたため、いつもと変わらない感じで仕事ができた。

落ちていた頃にトレーナーの家に引越して一緒に暮らし始めた。再会からここまでトレーナーに押し切られっぱなし、そして世話されっぱなしだったけど、これから多少なりとも返していきたい。

「リオちゃん一緒にお風呂入ろう！」

「やだ」

「えーいいじゃない女二人減るもんじゃなし」

「全身をやらしい手つきで触られて安心度が減る。もしトレーナーのことが好きじゃなかったら、たとえ同性でも投獄モノだからね」

「それは困る」

「そんなに慌てなくていいから」

「……もしかしてイチヤイチャが許された？」

「欲求不満で生徒さんに手を出さないよう、私が防波堤になる」

「ひどーい……」

数日して母親のもとを訪れると、やはり私がテレビに出たことは知っていた。

「リオ……今まで苦勞かけてごめんね……」

「気にしないで。隠れ住むのも結構楽しかったし」

「こんなに騒ぎになっちゃったら、今のところに住めないんじゃない」

「それね、学生時代にお世話になってたトレーナーさんのところにお世話になってるって言うか、転がりこんだって言うか……」

それを言うのと、母親は笑顔を見せてくれた。

「あのトレーナーさん、あなたに結構気があるそうだったけど。そのへんはどうなの？
ヒトの女の人とウマ娘の女の子のお付き合いの世界はよく知らないのだけど」

「え、あ、えー、今度ここに連れてきます……」

「そう」

全部見透かされていたみたいだった。考えようによつては親公認ということで、うちの側の許しを得る苦労はゼロになったというところだけだ。

病院に行ってきた結果をトレーナーに伝えると、部屋のを壊しかねない勢いで踊り始め、その勢いのまま御実家に電話を掛けて勢いですべての話を押し通してしまった。今週末、急遽^{きゆうきよ}トレーナーの御両親に会うことになったのだが、まあ、トレーナーと一緒にならなんとかなるかもしれない。

（『秋…十年目の再会』 完）

第四話 冬…キラキラの、キミの隣に

(ナイスネイチャ&トウカイテイオー)

(Side: ネイチャ)

クリスマスイブを控えた仕事帰り、久々に昔のことを思い出してしまった。六年前のあの日から、吹っ切ろうと思って吹っ切れず、吹っ切るのをやめてその気持ちと一緒に過ごそうと努力している。普段は忘れていたけれど、時々こうしてフラッシュバックするようになり悲しさに襲われてしまう。

今日はたまたまトレセン学園への用事だったから、ちょうど帰りに会ったテイオーを行

きつけのバーに強制連行した。テイオーは最初は何か言いたそうだったけど、アタシの顔がよつぽど酷かったのか、何も言わずに連行されてくれた。

大人になった特権は、何かがあつたら飲むという選択肢が取れるということ。アタシもテイオーもどちらも二十四歳、時が経つのが速いなあ……。

まわりはクリスマスを少し先取りした感じの雰囲気^{すざ}がただよっていて、お客さんもいつもよりちよつと華やかな気がした。そんな中で心を荒^{すざ}ませているのはバカみただけけど、ごめん。ちよつと許して。

☆ ☆ ☆

「ネイチャ、ネイチャってば。今日ホントにどうしたのさ。三倍速でお酒ばかり流し込んでるし、顔が初めて見るくらい赤いし、目もトロンとしてるしさ？」

あー……、アタシやっぱ酔っちゃつてんのかな……。なんか隣のテイオーがいつもの四割増しでキラキラして見えて、なんか、なんとなく良さそうで、こう……抱き枕にして寝ちゃいたくなくそうなくらい可愛いなんて思えてきちゃつてさ。ガラにもなく呑み過ぎた

かも……。

「どしたのネイチヤ？　ボクの顔に何かついてる？」

「イケメンの目と鼻と口？」

「やつぱり超酔ってるでしょ？　さすがにこのへんにしといたら？」

ジト目のテイオーもかわいいねえ。いやー嫉妬しつとしちゃうわ。

「今のネイチヤの顔、近所の商店街のオバチャンがボクを見る時の顔そっくり」

「誰がおぼしやんかー、テイオーはかわいいんだからしかたにやいでしょー」

「もう！」

テイオーがそつぽを向いた。何かをつぶやいているようにも見えたり見えなかったり。

……ま、いいか。

「テイオー、トレセンはどうう？」

「ネイチヤからそれ聞かれるの今日ここに来て四回目。ホントに帰って酔いを覚ました方が

がいいよ」

「そだねー、帰るかー」

「ホントに大丈夫？　こんな酔っ払い方してるネイチヤを見るの初めてなんだけど」

「だいじょーぶだいじょーぶ、アタシはおしゃけにつよいんだからー」

テイオーに心配かけちゃいけないと思つて立ち上がつて、……あら？ ら？

「もう言わんこつちやない！ ネイチャの家遠かつたよね？ ちよつとボクん家行くよ！」

気付いたら抱き止められていて、そのおかげで、床に引つくり返つて無様な姿を晒す事態は避けられた。……テイオーに背負われて帰つてゐる姿は無様な姿を晒すしい。

「ありがとねー、ごちそうになつちやつて」

「ほんとなんで今日はこんなになつちやつてんのさ。あと代金はいつも通り割り勘だからね！ 後でちゃんとちようだい！ ホントは高いお酒ばかり流し込み続けたネイチャにいつぱい出させたいとこだけど！」

さつきまで飲んでいたお酒の数々を思い出す。……あれ、なんでこんなものばかり頼んでたんだろ。これマジでお金足りなくない？ いや、貯金はあるっちゃあるんだけど、それに手を出したら負けで、でも払わなきゃいけないし……。

「あの一、ちよつとまかりませんかね？」

「ダメ。ボクが破産しちゃう。学園は安月給だつて毎回言ってるでしょ？」

「そっかー」

その時、ふと思いついた手段があった。なんだろう、今こそこの手段を使わないといけない気がした。

「……テイオーにカラダで払うのつてあり？」

「~~~~~」

つぶやいてみたら、テイオーが声にならない声で唸うなつて後頭部で頭突きをかましてきた。クリティカルヒット。

「……いふあい……」

「ちよつと反省して。次は本当にカラダでも取り立てるから」

あー、無様だ……さすがに鼻血は出ていないみたいだけど、ボロボロヨレヨレ、いろいろとまずつたな……。

テイオーはゆつくりと歩いてくれていて、心地良く揺れるおんぶ移動のおかげで、いつの間にか寝ていたみたい。

気がついたらベッドの上で、間近にテイオーの顔があつた。

☆ ☆ ☆

(Side: テイオー)

ネイチャのことは、よく考えたら、よく分からない。

ボクと同期で、自分のことを普通だつて言つて、『三着になるのがアタシらしいって』と、なんかちよつと遠い目をしてた。でもね、自慢するわけじゃないけど、あの時同じくらしいの歳で一番強かつたと自負しているボクと同じレースを四回走つて、そのうち二回も先着したのはキミだけなんだよ、ネイチャ。

……まあ、それを言いだすとボクとネイチャをそれぞれ負かしたマックイーンがもつと上つてことも言えちゃうけどさ。あと、ボクが出られなかつた有馬記念でネイチャとマックイーンをまとめて負かした先輩の方が強かつたとも言えるし。あ、でもその先輩とは後で勝負してボクが勝つたか。

『……テイオーにカラダで払うのつてあり？』

そこでスヤスヤ寝ているネイチヤがここまでの帰り道にこぼした言葉。背負っていたからちようど耳元にネイチヤの口があつて、小さい声だったけど頭をフルスイングで殴られ、さらに鋭いものが突き刺さったような感覚になった。所詮はヨッパライ、しかも普段は絶対にこんな酔い方はしないネイチヤがグデングデンになつて囁いた言葉だから、本気度はゼロどころかマイナスに違いない。だいたいボク相手にカラダで払うつて何さ。……ボクの事務仕事の手伝いでもやつてくれるのかな。

いや、そうじゃない可能性が99パーセントだつてのはうすうす分かつてるよ？ あの言葉が本気かどうかはともかく。でも学園の生徒の時から仲でいろいろあるじゃん？ だから事務仕事の手伝いをしてくれる、つてことにしておきたい。もうひとつの意味の方を期待していないと言えばウソになつちやうけど、ネイチヤとボク、ねえ……。

なんかいろいろ考えていると、ちよつと昔のことが思い出された。

トウインクル・シリーズ引退後、ボクはトレセン学園のダンス指導教官インストラクターになった。本当はトレーナーをやりたくて試験を受けたけど落ちて、今は再挑戦を目指しつつ学園で仕事をしている感じ。ちなみにネイチヤも近所で仕事をしている。ネイチヤが毎度おなじみの商店街に引退挨拶に行ったら、いろいろ話が回りに回って、この歳でお店を一軒譲り受けるような形で切り盛りするようになったっぽい。ただ、それだけじゃなくて、あのちっちゃい理事長の命で何かU R Aの仕事もやっているみたい。

お互い近所住みで、U R A関係の仕事をしていたりするから、今でもわりとよくこうして一緒に食事に行ったりする。ネイチヤのお店や家に行くこともわりとあった。でも、こうしてボクの家——学園の職員寮——に連れてきたのは初めてだった。だって狭いし。

ネイチヤって、とても面倒見が良くて、街中の人から頼りにされて、学園の後輩からとても慕たわれていて、とてもまぶしい。キラキラしてる。今でもずっと。

ボクはレースでは強かったし、一年ぶりの有馬でも勝てたし、今はダンスをみんなにバリバリ教えてる。授業アンケートで生徒のみんなが喜ぶ声を聞くことも多くて誇らしい。でも、ネイチヤにはかなわない気がしてる。ずっと。

ホントさ、なんだかわかんないけどモヤモヤしてる。この前久々に会ったマックイー
ンに話したら『テイオーさん、それはおそらく嫉妬心しよととしんですわ。かつて私が貴方に抱いて
いた気持ちの一部でもあります』って。その時はまさか、って思った。実はそうじゃな
かった。

……この気持ちを何と言うかが分からないようなウブな二十四歳じゃない。でもはつき
りと意識して口にしてしまうと、もう今のようなボクとネイチャの関係性ではいられない
のは確かだった。

すやすやと眠っているネイチャに近づいて顔を見た。とても綺麗。ただ、今は酒くさい
のが超難点。マイナス三千点。頬をつついてみる。柔らかい。そして、その横の――

「ん、んんん……」

ネイチャが急に唸り声を上げ、目をうつすら開いた。

そして。

ネイチャがなぜかボクの背中に手を回して、

唇を、奪われた。

何秒か、あるいは何分か。

「……テイオー」

「な、に……」

「……トイレを、」

察した。急いでトイレに連れて行っていつ吐いてもいいように用意し、扉を閉めた。それからほどなくして察するに余りある音が中から聞こえてきた。他の人に見られてたらネイチャのイメージがマイナス五億点になっちゃう惨状だった。この場にいたのがボクだけで良かったね、ネイチャ。

ぐでんぐでんでへ口へ口なネイチャをそのまま風呂に押し込んで、こういう時のために予備で置いていた服や下着を扉の前に積んでおいた。

しばらくして、気まずそうな顔をしてネイチャが出てきた。まだ顔が青白い気がする。

「……上がりました」

「ボクも入ってくるからちよつと待ってて。ドライヤーはそこ。お水は冷蔵庫の中。カッ

プは棚にあるのを適当に使って」

それだけ言うとしよつと早足で洗面所に行き、ドアを閉め、もたれかかって床に沈み込んだ。

「……あー、……っ」

額に手を当てた。唇に残ったさっきの感触がまるで離れなかった。心臓がどきどきしたままです全然落ち着かなくて、しばらく立ち上がれなかった。

ようやくシャワーにたどり着いた。少し熱めにしたお湯を長めに浴びて、心をほんの少しだけ落ち着けることに成功した。

☆ ☆ ☆

「お待たせ」

部屋に戻ると、髪を下ろしたネイチャが手持ち無沙汰な感じで、少しだけ居心地悪そうに座っていた。顔色はだいぶ良くなっていた。ネイチャに対してどことなく色つぼさめ

いたものを感じてしまつて、落ち着けたはずの心臓がまたどきどきしてきて収まらなくなつた。

「ずいぶん長かつたね。……髪と尻尾、乾かすの手伝おつか」

「……よろしく」

ボクの普段の髪型は、今もトウインクル・シリーズの選手だった時と変わらない。それを解くのはシャワーを浴びて寝る時くらいなので、合宿をしている時はともかく、普段は他の人に見せることがない。だから、髪を下ろした姿を見せるとよく驚かれる。

「テイオーつて、髪を下ろすと結構長いんだ」

「ネイチヤも、今の髪型見ると誰だか分かんないや。美人度百割増しだよ。キラキラ度も」

「百割増しつて十倍じゃん……おだてたつて何も出ませんよー……いや、むしろおだてられる前にいろいろと出して一杯返さなきゃね……」

「いいよ。返さなくて。あ、でもお金は返してね」

ネイチヤはとても丁寧にブローをしてくれる。ボクも別に適当にやつてるわけじゃないけど、それよりもレベルが高い。

そういえば、バーでネイチャが話そうとして、その前に酔い潰れてしまっていたのを思い出したので、聞いてみることにした。

「ねえ、ネイチャって、い——」

「今も独りだよ」

ボクが何を聞こうとしているかを見事に察知して当て、かぶせるように返答が来た。お店での様子から察してはいたけど、本当にそうだったらしい。

「失恋を六年も引きずってる重い女だっと思ってる？」

「思ってるけど……お互い様だから」

現役選手時代のネイチャとトレーナーは、まわりから結婚十年目の夫婦みたいな空気感だと言われるような雰囲気かを醸し出していた。その頃からすでにトレーナーはトレーナーの幼馴染と付き合っていて、ネイチャもそれは知っていた。

ネイチャのトレーナーは、家の事情でネイチャの引退とともにトレーナーを辞めて故郷に帰ることになっていたから、最後に踏ん切りをつけるためだと言って告白して、やつ

ぱり失恋した。あの日のネイチャがお酒を飲める歳だったら、きつと今日よりも酷いことになっていたかもしれない。

「ネイチャはすごいよ。きちんと告白できて」

「……でも六年引きずつてるし……」

実はボクも最近まで似たような感じだった。現役時代は会長一筋だと言いつつ、なんだかんだで一緒に活動してきたトレーナーのことは好きだった。トレーナーに付き合っている人がいたのもネイチャと同じで、それを知っていたのもネイチャと同じ。でも、ボクは告白できなかった。トレーナーは今もトレセン学園にいて、あの時付き合っていた人と結婚して楽しそうにしている。ボクはトレーナーにとつて教え子で、職場の後輩で、でもそれだけ。そしてネイチャとは対照的に、いつしかトレーナーへの恋心も薄れた。

新しい恋をしたから。

もしかしたら、本当に初めての本気の恋かもしれない。

その相手にひたすら言葉を紡ぐ。

「ネイチャはみんなから好かれてて、慕こわれてて、キラキラしてて」

「テイオーの方がキラキラしてるでしょ」

背後からのネイチャの言葉に首を振った。

「現役の時はず、最初は会長以外見えてなかったんだ。ただ会長を目指して走る。まわりの子なんてほとんどどこか全く気にしてなかった」

「知ってる。アンタはひたすらまっすぐだった。いつもアタシの前において、アタシには目もくれない。アタシは所詮三着がお似合い、テイオーにかなうわけがないって思ってた」

「でもボクは骨折して、三冠を獲とるチャンスすらなくなっちゃって、リハビリをしながら泣いてたんだ。菊花賞の中継も最初は観みたくなかったけど、でもつけて観みてて、そこにキミがいた」

「四着だったけどね」

「ボクには一着も四着も、十八着すらも遠かった。……そこにいなかったから」

そう、あの場にボクはいなかったんだ。立てなかった。

「画面の向こうで走りきったネイチャが、いつも聞いてた『三着がお似合い』なんて言葉と全く違う雰囲気で、一瞬だけ映った悔しそうな泣き顔で、ああ、キミもこういう顔してたんだな、つて」

「うん。してたよ」

「次の有馬記念も観た。ネイチャの近くを走ってた一着の子がとてもすごかったけど、ネイチャもマックイーンのすぐ後ろに食らいついてた。そして、また泣いてた」

「……うん」

「次の天皇賞（秋）でネイチャと久しぶりに走って、そして負けた」

「アタシと半バ身差とちよつとしかなかったけど」

「悔しかった。ボクもネイチャも頑張つて、でもボクは手前で力が切れて、ネイチャはその先に行った。……負けは負けだよ」

「テイオー……」

「その次の有馬記念も覚えてるよね。いろいろあったけど言い訳はしない。ネイチャはずっとボクの前にいた。全く追いつけなかった」

「ずっと頑張っていたネイチャが眩まぶしかった。」

「怪我とかもあっても引退かも、って噂されたけど、また走りたい、って言ったらトリーナーが頑張ってくれて、それでしばらく鹿児島に行つてリハビリしてた。……今だから言うけど、大阪杯、現地でこつそり観てたんだ」

「……そつか。マックイーンに全然追いつけなかったの、観てたんだ」

「頑張れる、頑張りたいって思った。その後また骨折したけど、ネイチャの姿を見て頑張った」

「それであの有馬記念、か。すごいよテイオー。一年ぶりに走つて勝つちやうなんてさ。ラストでどんだん前に行つちやうだもん。極限のキラキラだった」

「……ゴーマンだつて言われちやうかもだけど、ネイチャがいたからだよ。今度は絶対に負けたくない、勝つて思つてたから。やつとキラキラしてたネイチャに勝つて嬉しかった」

「………ッ、ふつ、アハハハハッ！」

「ネイチャ？」

「そつかー、天下のテイオーさまにキラキラしてるって思われてたんだ」

「うん」

「……なんだろう、隣の芝生は青い、つてやつかな」

「かもね」

お互いに、キラキラしてるつて思ってたんだ。そしてたぶん、それは今も。

そんなネイチャとなら、これからもずっと一緒にやっついていけそうかなつて、思った。心臓がまた、どくん、と鳴った気がした。ダービーの時に似た、でも少し違うドキドキだった。

☆ ☆ ☆

(Side: ネイチャ)

「それできネイチャ、話を戻すんだけどさ」

「何の話してたっけ」

「ネイチャが今も独り身だつて話」

「うん」

トレーナーさんとの別れの日から六年、なんだかんだでずっと引きずってる。当たり障りのないメッセージのやり取りも最近ご無沙汰だった。仕事柄、一年に一回くらいは会うこともあるけれど、会った時にはやはりまだ心がちくり、と痛む。枕を濡らさなくなっただけまだましかもしれない。

商店街のじいさまばあさま達からは『ネイチちゃんに会ってみたいって子がいるんだけど』とお見合い話がしょっちゅうやって来る。トレセンに学園に入りたての頃に、新聞部のインタビュでテンパって『お金持ちのイケメン彼氏募集中!』って言っちゃったのが未だに伝わっていて、アタシには不相応なすごい人ばかりが紹介される。一回は会ってみたり、その前にお断りを入れたりして、のらりくらりとかわしてきた。でも、こうして独り身でいたって、あの人と一緒になれるわけでもない。

ずっと独身を貫く決意があるわけでもなく、もしいいパートナーがいるなら、結婚はしてもいいかなとは思っている。もちろんパートナーは誰でもいいわけじゃないけど、この際性別は気にしなくてもいいかと思うようになった。たとえば今目の前にいる――

「ボクと付き合わない？」

「いいね……はい？」

思わず流れて返事してしまつて、頭の中で反芻はんすうして、なんかとんでもないことを言われたことに気付いた。

「テイオーが、アタシと？」

「うん」

「本気？」

「……ほんき」

こちらに向き直つたテイオーの姿に、ドキツとした。それはきつといつもと違つてロングヘアを腰近くまで垂らしているせい。テイオーの顔が真っ赤だった。たぶんアタシも同じ。

「……その心は」

「好きだから」

固まつた。ふと目の前にいる子のことを思い浮かべた瞬間、その子から告白されるといふ、ドラマにしたらベタ過ぎて却下されるような展開だった。すぐに返事をしようか迷つた。夕方からの話の流れだと、いきなりずつと想っていた人を捨てて乗り換えたように見えちゃうんじゃないか、つて。

そう思つて視線を上げると、テイオーが覚悟をそのまま形にしたような真面目な顔でこちらを見つめていた。そのまっすぐでキラキラした姿からはもう目を離せなかつた。もう、言うべき言葉はこれだけだつた。

「そっか。ありがとね」

テイオーの顔に少し不安な表情が浮かんだ。だからすぐに言葉を続けた。

「ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

「ま」まで言つたあたりで、笑顔を爆発させたテイオーがアタシの方に飛び込んできて、ベッドに押し倒されたみたいになつた。しばらくして状況に気付いたテイオーが顔を真つ赤にしてアタフタし始めた。

「え、えつと、これは他意はナクテ……」

「他意が無いなら、早速いろいろやりたいつていう本意だけ？」

「……いじわるだ」

「まあ、このままお楽しみコースに行つてもいいかなつて思つちやうなだけで、今のアタシはお酒くさいし、……日付的には明日、というか今日の深夜が、いいかなつて。お互いがクリスマスプレゼント、なんて。……あ、やつぱなし。自分で言つといてハズい」

その言葉にテイオーはクスクスと笑った。

「ネイチャってロマンチストだね。でもそこが好き」

「いきなり褒め殺ししないの」

もう夜遅くなつてたから、終電はあるけどここに泊まらせてもらうことにした。一緒のベッドで寝ようとした時に『やっぱ狭いかも……』と言われたので、酔っ払っていた時に思いついたアイデアを実践して、テイオーを抱き枕にして寝た。テイオーの方が少しだけ小柄なので丁度良かったけど、とても熱かった。……多分熱さはお互い様。

（『冬…キラキラの、キミの隣に』 完）

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

この本『キラキラの、キミの隣に』では、今までに書いた短編で本にしていなかったものから、季節に合うものを各一本選び出し、加筆修正して収録しました。表題は第四章、冬の話のタイトルをそのまま採用しています。

第一話は、pixiv 投稿作品の中で初動が大変高かったヒシミラクルさんの話（前後編）を加筆修正して収録しております。自分が漁る限り、ミラ×トレSSや小説は結構しつとりした感、あるいは秒速でイチャイチャする系の作品が多く、そこに比較的あつさりめの

ものを出してニツチを得たのではと勝手に自己分析しています。

第二話は、実は自分にとって初めてのウマ娘小説でした。pixivへのウマ娘小説投稿を始めた時期から二年前、『ご注文はうさぎですか?』の長編をずっと書いていた時期に半分ほど書いて、そのまま公開することなく長く置いていたものをようやく書き上げることができました。

第三話は、アニメでは仮の名前で出ていたウマ娘が主人公です。彼女のモチーフ元のお馬さんは小説の通り、ナイスネイチャさんと同期（91世代）で、菊花賞を勝ったお馬さん・レオダーバンさんです。

競走馬の記録にある「没年不詳」や「用途変更（廃用）以降の消息不明」は、それが老年期ならば天寿を全うしていることがほとんど（ウマ娘化されているお馬さんだとサムソングッズさん）だと言われていますが、そうでない場合は悲しい結末になっていることが多く、そのような「消息不明」が、今回の話の元になった一九九一年の菊花賞馬のように、GIタイトルを獲ったお馬さんであってさえも起きたことがあります。この菊花賞で

四着となったナイスネイチャさんが、GI未勝利ながら二〇二三年五月に天寿を全うするまで一時も行方不明となることなく健在であったのとは対照的でした。

第四話はナイスネイチャさんの史実でのもう一人の同期・トウカイテイオーさんとの話です。小説での記載の通り、ナイスネイチャさんと四回走り、そのうち二回はナイスネイチャさんが先着しています。ウマ娘のゲーム育成ストーリー・アニメともライバル関係として描かれ、二〇二三年春に公開されたストーリーイベント『されば君、かなし』の最後に二人がダンスをしたのは大変最高でした。

引き続き『ご注文はうさぎですか？』二次創作小説との並行執筆を進めていきますので、どうぞよろしく願います。

キラキラの、キミの隣に

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二四年（令和六年）九月二十九日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)